

篠山市の古文書について

— 『楽翁文書』と『丹波篠山藩「青山家」古文書』 —

京都府立大学大学院文学研究科
史学専攻博士前期課程 1 回生
稲穂 将士

はじめに

2014 年度文化遺産フィールド研修では、篠山市内の文化遺産について、重要伝統的建築物群保存地区（以下重伝建地区）や古民家についてなど、建築物の保存や活用に関するお話をたくさんお聞きすることができた。その一方で、篠山市に残された古文書や絵図などの保存や活用についてのお話は、日程の都合上あまり聞くことができなかった。

篠山市には篠山藩の藩政史料をはじめ、多くの古文書や絵図が残されている。それらは篠山市立中央図書館や篠山市立青山歴史村、兵庫県立篠山鳳鳴高校などで保管されている。本稿ではそのような文化遺産について、中央図書館と青山歴史村に所蔵されているものを中心に、後日おこなった補足調査をもとにして検討していきたいと思う。また最後には、それらの古文書でどのような研究ができるのかを考えてみたい。

1 『楽翁文書』

本稿ではまず篠山市中央図書館に所蔵されている『楽翁文書』についてみていきたい。『楽翁文書』とは昭和 35 年（1960）4 月に没した、篠山の郷土史家である奥田楽々斎という人物が所有していた史料群である。奥田楽々斎については、彼自身についての資料が少ない。そのためにどんな人物であったのかはよくわからないが、まずは限られた資料の中から、彼がどういった人物であったのかをみていきたい。

(a) 奥田楽々斎とは

篠山新聞社が昭和 8 年（1933）に発行した『多紀氷上人名鑑』によると、奥田楽々斎は現在の篠山市河原町に居を構え、「彫刻家又茶人歌人として聞ゆ」とある。明治 37 年（1904）の日露戦争に出征し、退役後に奈良にて彫刻を学んだ。篠山では彫刻家として活動していたようだが、特に竹材の彫刻で有名であったようだ。彫刻で名を馳せると同時に蒐集趣味もあり、「趣味雑誌趣味壇」というものを発行するなど、その活動は多岐にわたっていたようだ。

晩年は、篠山城跡管理委員会の委員や篠山町文化財専門委員、多紀文化顕彰会の会長を務めるなど、篠山の文化遺産の保存や活用においては、先駆的な人物であったのではないだろうか。

(b) 『楽翁文書』概要

彼は亡くなる 2 年前の昭和 33 年（1958）に、現在の篠山市域である多紀郡の地誌の『多紀郷土史考』を著している。『多紀郷土史考』はそのあとがきによると、奥田楽々斎の長年の研究をまとめたものであるようだ。この『多紀郷土史考』として世に出された、彼の地域研究で使用されたものが、『楽翁文書』であると考えられる。

『楽翁文書』は先述したように、篠山市中央図書館に所蔵されており、全 396 点からなる文書群である。この文書群には篠山地域に関する近代の新聞記事や近世の古文書を中心としているが、その他地域の史料なども残

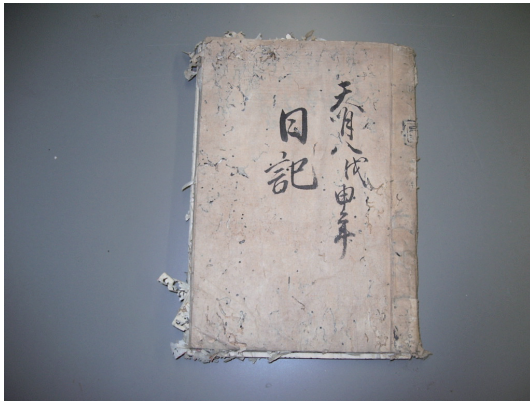


写真1 「天明八戊申年日記」
写真は天明8年（1788）の藩政日記。



写真2 青山歴史村内の古文書館

っている。近世の古文書の中には「御所替日記」や「青山藩御家人役付」、「篠山藩御扶持帳」、「京都御火消詰所渡し物」など、篠山藩政を明らかにしていくにあたって、重要と考えられる史料が多くある。

また、『楽翁文書』の中には酒造関係史料や、キリシタン関係史料、「うまいもの集」と題された、奥田楽々斎が書きとめたものがある、これらから彼自身の興味や関心が、何にあったのかを、この史料群に含まれているものから考えることができるのではないだろうか。

(c) 保存・整理状況

『楽翁文書』の保存状況については、篠山市中央図書館の杉野喜美代氏からお話を伺うことができた。杉野氏のお話によると、この文書群は全点同じ場所に固めて所蔵されており、他の図書と同じように書庫で保管されているようだ。

この文書群は近年整理されており、平成25年（2013）に神戸大学と連携し、篠山市民で結成された「地域資料整理サポーター」を中心に目録作成などがおこなわれた（井上2014；111頁）。サポーターの方々の活動は活発になってきているようなので、今後この『楽翁文書』が更に活用されていくことだろう。

2 『丹波篠山藩「青山家」古文書』

(a) 概要

次に篠山市指定文化財の古文書である、『丹波篠山藩「青山家」古文書』（以下『青山家文書』）についてみていきたい。丹波篠山藩主であった青山氏は寛延2年（1749）に丹波亀山から転封し、その後幕末に至るまで篠山を支配した譜代大名である。

この史料群は現在篠山市立青山歴史村に所蔵されており、その点数は3218点にもものぼる。文書の内容としては、青山氏が篠山に転封してくる以前の、浜松藩主や亀山藩主を務めていた時期のものや、近代のものまでが含まれている。それらの中でも中心となるのが、藩政日記や領地目録である。藩政日記は慶安元年（1648）以降の小諸藩主時代のものから、いわゆる廃藩置県がおこなわれる直前の明治3年（1870）のものまで、ほぼ毎年分残存している（写真1）。

このように藩政史料がまとまって残されている例は、岡山藩の池田家文庫などがあるが、全国的にみても珍しい事例であるといえるだろう。



写真3 嘉永年間の藩政日記
明治期の水損により、一部板状になっている。



写真4 青山歴史村内での典籍類の展示
壁面に版木を取り付けて展示している。

(b) 保存・整理状況

『青山家文書』は青山歴史村の古文書館で保管されている（写真2）。青山歴史村はその敷地内に、明治時代の青山家の別邸である桂園舎や土蔵が3棟あり、土蔵の1つは篠山藩校の「振徳堂」の蔵書などの史料の展示がおこなわれている。その展示をおこなっている土蔵とは別の他の土蔵2棟が、古文書館として利用されている。

『青山家文書』の保存や整理状況については、篠山市教育委員会社会教育・文化財課文化創造係の伊東大樹氏にお話を伺った。伊藤氏によると古文書館には『青山家文書』以外にも、他の篠山市所蔵古文書についても一括して保存されているようだ。篠山市に寄託される前は、財団法人青山会が管理しており、その時代に仮目録の作成と整理がある程度おこなわれたようで、目録が古文書館に保管されている。なお財団法人青山会は青山家の子孫や、その家臣の子孫たちで構成されていたが、平成10年（1998）に解散してしまったようだ。

青山会が所蔵していた時に作成された『青山家文書』の目録であるが、その解題によると、各史料が「仮番号」としてナンバリングされている。そのナンバリングの方法も目録の解題によると、「古文書館1号館の2階から1階の順で、保管状態のまま番号を付した」（財団法人青山会1993；1頁）とあり、内

容ごとに分類し直すなど、整理の余地を残しているといえるだろう。

『青山家文書』の中の「藩政日記」は、青山家が明治期に東京へ移住した時にそちらの方へ移動し、また大正期になってから篠山に戻り、現在の場所に保管されるようになっている。しかし、その東京で保管されていた時に水損があったため、文書の紙が接着してしまい、板のように硬くなってしまっている（写真3）。数点については東京大学史料編纂所が修復作業をおこなっているようだ（鳴海・上田・大澤2009；4頁）。

また『青山家文書』の中には、大量の絵図資料が含まれているが、そちらは目録にも掲載されておらずほとんど未整理であったが、平成21年（2009）に大阪歴史博物館を中心に修復や整理がなされ、目録の作成などがおこなわれている（鳴海・上田・大澤2009；1頁）。

(c) 活用について

以上のように保存・整理されている『青山家文書』であるが、次はそれらがどのように活用されているのかを見ていきたい。

先述したように篠山藩が所有していた典籍類は、青山歴史村の中で公開されている（写真4）。公開されている史料は青山家の家譜や、藩校で教科書として使われていた漢学書の印刷に用いた版木が中心である。これらは、青山歴史村が篠山市の所管となる前に、青山



写真5 「天明八戊申年日記」内の1月30日の記事
 天明の京都大火についての報告がなされている。

会が青山家の顕彰のために展示していったものを、そのまま継承している形になっていると考えられるだろう。

また、伊藤氏によると「藩政日記」のような藩政史料は上記のような状態であり、さらに虫損なども多く解読が難しく、紙同士が接着し硬化している史料は開披することが技術的に難しいなどといった理由により、中身の整理が十分にできないことも活用を困難にさせているとのことであった。ただし、篠山市の財産でもあるこれらの史料群の中身を、市民の方々に伝えるのも教育委員会の責務でもあると考えるので、今後はできる限り活用したいと伊藤氏は述べられた。

3 篠山藩政史料を用いた研究 -篠山藩京都火消役について-

(a) 藩政日記

最後に篠山市に残された古文書の中でも、特に藩政史料を用いて、どのような研究ができるのかを簡単にみていきたい。

天明8年(1788)の藩政日記である「天明八戊申年日記」をみると、同年1月30日に京都で起こった、「天明の京都大火」に関する記事がある。天明の京都大火とは江戸時代の京都における最大規模の火事で、御所や二条城を含む、市中の約75%が焼失してしまった。篠山藩は少なくとも安永元年(1722)には京都火消役として任命されている(藤本2005;51頁)ために、このような記事が残されているのだろう。

天明の京都大火に関する記事によると、「申ノ半刻過」(午後5時頃)に篠山藩の京都留守居により継飛脚で報告が入った。その報告によると、30日明け方の「寅ノ刻」(午前3時~5時頃)に「川東」より出火したとのことだった。「川東」とは鴨川の東を指しているのだろう。この一報を受けた篠山藩側はその日の夜に人足を派遣する事を決め、準備をしていると「酉ノ半刻過」(午後6時頃)に第2報がもたらされる。それによると、「川東」から出た火は対岸にある仏光寺にも飛び火し、そのまま延焼を続けていき、二条城やさらには御所にも類焼しているとのことであ

った。この情報をうけ、篠山藩では城の矢倉で太鼓を打って「郷町人足」を集めた。しかしそれだけでは足りなかつたので、町方へ「増人足四拾人」ばかりを申付けて、「戌之下刻」（午後8時頃）に「御出馬」したようだ。これらのことから、藩主自らが京都に向けて出動したことが考えられる。

(b) 「京都御火消詰所渡し物」

篠山藩京都火消役は『楽翁文書』の中にある「京都御火消詰所渡し物」という史料からも考えることができるので、次はその史料をみていきたい。

「京都御火消詰所渡し物」は、その表紙によると明治3年（1870）1月に作成されたものであると考えられる。この史料には幕末期の篠山藩の京都火消について、役人の担当が書き上げられているなど、篠山藩の京都火消を考える上で重要な史料であろう。

この史料の中には「京御屋敷御出入人々」という項目があり、ここには篠山藩の京都屋敷に出入りしている商人が「御馬具所 竹屋 東洞院西入 二文字屋利兵衛」といったように、合計で24名書き上げられている。この項目が「京都御火消詰所渡し物」の中に収録されていることから、火消に必要な物品はこれらの商人たちから仕入れたのではないかと考えられる。

以上のようにこれら2つの史料からは、今まで深く解明されていなかった、篠山藩の京都火消役について読み取ることができる。このことは、篠山藩のみならず、他の諸藩がなった火消役についての理解を深める足がかりにもなるだろう。

おわりに

篠山市には、先にも述べたような市民の方々が中心の「地域資料整理サポーター」が

いらっしゃる。教育委員会とサポーターの方々が連携することによって、今後さらに史料の整理や活用の動きが活発になっていくことが予想される。

また本稿では篠山藩政史料を用いてどのような研究ができるのかを、京都火消役を題材に見てきたが、豊富な史料群からはこの他にも、たくさんの事象を解明することができるだろう。このような研究が進むことは、事象の解明ができるだけでなく、地域の人々に篠山の貴重な文化遺産である、古文書群の内容の理解をすすめる素材にもなりうるだろう。今後も篠山市所蔵の古文書が研究にも活用され、その全容が解明されることを期待したい。

【謝辞】

本稿の作成にあたり伊藤大樹様をはじめ篠山市教育委員会社会教育・文化財課の皆様、一般社団法人ノオトの山本宏美様、篠山市中央図書館の杉野喜美代様、ならびに篠山市の皆様大変お世話になりました。末尾ではございますが心よりお礼申し上げます。

【参考文献】

- 奥田楽々斎（1958）『多紀郷土史考 上巻』多紀郷土史考刊行会
- 奥田楽々斎（1958）『多紀郷土史考 下巻』多紀郷土史考刊行会
- 木村礎・藤野保・村上直（1989）『藩史大辞典第5巻 近畿編』雄山閣、414-427頁
- 国史大辞典編集委員会編（1988）『国史大辞典 第九巻』吉川弘文館、1032頁
- 財団法人青山会（1993）『篠山藩（青山家）史料目録』
- 鳴海邦匡・上田長生・大澤研一（2009）『「篠山藩青山家文書」絵図目録：近世前期大坂周辺絵図』、1-10頁
- 畑貞一（1933）『多紀氷上人名鑑』篠山新聞社、65頁
- 藤本仁文（2005）「近世京都大名火消の基礎的考察」『史林』88-2、34-68頁